その後、「オスマン帝国末期イスタンブルの演劇空間――ポスター資料の分析を中心に――」（『駿台史学』129号）という論文を書きました。これはAA研時代にあつめた1870年代から20世紀10年代、つまりオスマン帝国末期のイスタンブルにおける演劇のポスターとプログラム170点を分析したものです。つまり、ヨーロッパの世紀末ですね。あの頃のイスタンブルがヨーロッパの演劇都市、パリとかロンドンとかウィーンとかプラハとか、そういう都市と同一のレベルで考えることができる。つまりヨーロッパとアジアを対峙させて考えるんじゃなくて、いっしょくたに考えるようにすることが、ある意味でヨーロッパ崇拝の日本社会の中でヨーロッパを相対化する作業につながるということを考えているわけです。それが必要です。

最後に、『前近代トルコの地方名士：カラオスマンオウル家の研究』を刀水書房から定年退職した2009年4月末に出版しました。これは、1997年にトルコ語で出版したあとで発見した文書によって増補したものです。定年退職後は財団法人東洋文庫の研究員という40年来の資格が生きていて、ここから科研をとっているので、短期間ですがトルコに行くことができます。「近代トルコの地方名士」というタイトルです。イスタンブルの「オスマン古文書局」に行って、最近はやりの「資産台帳」研究のひとつですが、「1845年のマニサ地方の人々の資産台帳」66冊をたったの1日でDVDに入れてもらいました。お金を払おうと思ったらあまりに高いんで、あわてて町に出て換金しましたけれども。それを考えれば、いまでは1週間イスタンブルに行けば史料が集まってしまう。その代わり面白くない、味気ないですね。本当は昔の文書局の研究がどんなに牧歌的で面白かったかという話もしようと思っていたのですが、あまりにも学問的にならないんで省略します。1845年というのは、ちょうどタンズィマート改革と1838年のトルコ-イギリス通商条約の2つ、つまり外国貿易の拡大とタンズィマートの中央集権化で社会が動いているさなかのマニサ地方の人々の様子がどうなのか、その中でカラオスマンオウル家はどうなっているのかという問題を考えました。結論は、やはりカラオスマンオウル家にとって最後まで残ったのはチフトリキ、土地です。今でもかれらはチフトリキを持っています。徴税請負は近代になるともう制度として続かない。ワクフも1865年ぐらいからかな、国家管理になります。やはり最後になってまだ残っているのは土地だし、それでもってマニサという土地の名士として、いまだに存続しています。最近それを論文にまとめて東洋文庫の欧文の紀要に日本語で書いて翻訳してもらいました。いまはトルコの友人オゼル・エルゲンチさんの「退官記念論文集」に掲載するべくトルコ語で執筆しています。これでそろそろカラオスマンオウル家の研究も一段落するかなというところです。今日のお話も少し長くなりましたけれど終わりにさせていただきます。どうもありがあとうございました。

## 質疑応答

**安田：**京都大学のイスラーム地域研究センターの安田と申します。本日はありがとうございました。わたしはシリアの方の研究をしていた関係で、アーヤーン層というものが、やはりここ最近何となく研究に出てくるようになって関心があったので、自分の興味、関心の方から先生にご質問をさせていただくんですが、近代トルコにおいては、やはりアーヤーン層というのはもう過去のものとなってしまったのか、それともまだ現代的には意義というものがあり続けるのかという点に関して、現地のいろいろな交流などから何かありましたら、教えていただければと思います。

**永田：**良いご質問をありがとうございました。基本的には、いまではアーヤーンの問題はもう過去

の問題になっていると思います。社会が非常に多様化して、いろんなかたちでいろんな人が出てきてますよね。ですからやはりアーヤーンの問題、ちょうど私が研究したような、あるいは今日お話ししたような一つの社会層として地域をまとめてゆくアーヤーンの役割はやはりもうないと思います。しかし、アーヤーンたちの次の世代が今のトルコ社会なりシリア社会なり、あるいはエジプトなりで、ある程度存続していると思うんです。家系が滅びちゃったなんてことはないと思いますので。それで、カラオスマンオウル家について言えば、例えば現代トルコ文学の鼻祖と言われる作家がいます。ヤクプ・カドリ・カラオスマンオウルと言うんですね。この人はムスタファ・ケマル・アタテュルクの片腕に近い存在で、共和国の初期に40年ぐらい外交官やってますね。政治家というよりも文学者・官僚ですけれども。と、同時に『Yaban（異邦人）』とか『Nur Baba（ヌール・ババ）』などの社会派的な小説を書いています。Nur Babaというのはイスラム神秘主義教団の長老のことですが、長老がいかに農民たちをだましているかみたいな小説で大問題になったのですね。それからもう80歳を過ぎていると思いますけれど、アティッラ・カラオスマンオウルという人がいます。1974年にトルコ政府の経済顧問をやってました。それは中道左派のビュレント・エジェビットという人が首相のときですね。この政権が倒れた後、アメリカに行きまして、世界銀行の副総裁をやって、もう引退してトルコで余生を送っていますけれども。一般化はできるかどうかわかりませんが、そういうかたちでいろんなところに、まだいろんなかたちで存在すると思うんですよね。私は昔のアーヤーンの家系はまだどこかで存在感があると思うんですね。そう思ったのは、私がトルコから帰ってきた直後にドウッシュというトルコで一番の土建屋さんと日本の鹿島建設とが契約を結ぶ時に通訳をやったことがあるんですよ。そのとき土建屋の親方が、アティッラのことを悪く言うんで、私が「アティッラって有名なカラオスマンオウルだよ」と言ったら、「いや、名前は同じだけど違うよ。カラオスマンオウルみたいな由緒のある家の人間はあんなinsafsiz仮借ないことをやるはずがない」と言ってました。なにかいまでもそんな感覚があるような気がするんですね。実はミュバハト・キュテュクオール女史はエーゲ海沿岸地方のタヴァス（Tavas）郡の「資産台帳」史料を使って本を書いていますね。多分、彼女はイズミル出身のはずです。あっちの方の名家の出だという話をいつか聞いた記憶があります。だから現在いる人たちで結構そういう人がいてもおかしくない。彼らよりももっとアコギに商売したり政治をやっている人間が正面に出ています。旧名家の存在を確かめる一つの方法は新聞の死亡広告欄。それにそのような家が出てきますね。アシュラーフの何某家という形で。そういうものをうまく使ったりすると多少は何か分かるかもしれない。多分に希望的な観測ですけれども、どこかで現代のそれぞれの社会に影響力を持っているような気がします。たとえば、地方選挙ですね。そういえば、最近亡くなったオーラル・カラオスマンオウル氏は、マニサ地方選出の国会議員でした。日本だっていまだに保守本流の地盤は農村の豪農的な人ですよね。やはりそういう構造はあるような気がしています。

**仁子：**同じくイスラーム地域研究センターの仁子と申します。永田先生のご興味とちょっと外れるかも知れないのですが、アーヤーン層というのが文化の担い手としてどこまでの意味を持っていたのか、例えばウラマー層などと、どの程度のかかわりを持っているのか。文化資源ということであれば、例えば蔵があって、開けたらすごいものが出てくるようなことがあるのかどうか、そのようなことを教えていただければ有り難いのですが。

**永田：**はい、これも言いそびれたことです。大変良いご質問なので、ありがとうございました。ま

ず、蔵を開けたら何か出てくるということはありません。このカラオスマンオウル家はトルコ随一のアーヤーンなんですね。日本だったら、例えば能登の時国家とか、ああいう家は必ず柳行李から大量の資料が出てくるんですよね。日本ではよく話題になるでしょう。このカラオスマンオウル家に関する情報の多くは私が提供してます（笑）。かれらは自分の家系のことを何も知らないですよ、本当に。昔うちの家系に変なやつがいたとか、火事になったとか多少は知っているんですけれど。さっき、うちのチフトリキの裏庭にアラビア語で書いた石が転がっているという話がありましたね。ですから非常に可能性が薄いですね。回想録を書いている人もいることはいるんです。メネメンジオウルという家系があって、その人の回想録がありますけれど、ほとんど政治的やり取りだけ。それからジェラル・バヤル。トルコの第三代目の大統領です。西アナトリアにおいてカラオスマンオウル家のライバルだと思うんですけれども、かれには『Be de Yazdım』（『私も書いた』）という長い回想録があるんですね。しかし、それはやはり「青年トルコ人革命」以後の「統一と進歩」派の政党内の政治争いの話ばかりで、家のことは（まだ全部読んでいないのですが）書いてなさそうです。ヤクプ・カドリも文学的な回想や外交官としての回想にはほんの少し家系のことが出てくるだけです。基本的にそういう文字資料がないんですね。だから、われわれが研究者として片々たる文字資料をつないで、ある程度内容のあるものにしていくのはもしかしたら研究者の役割かも知れません。

これは私もいつも気になっているんです。ああいう人たちはワクフをやりますでしょ？　結構本、いや本じゃなくてトルコもアラビア文字の印刷は遅いですから、写本を結構持っているんです。そういうものを見ますと、一番に持っているのがコーランなんですね。それからハディース。ブハーリーのハディースとかですね。それから宗教関係のものですね。ほんのたまに歴史なんかも出てくるんですね。でも、それだけだと、例えば田中優子さんに日本の江戸文化の研究があるでしょ？なかなかああいうレベルまで行かないんです。でも、そういうところから考える可能性は、かなりあると考えています。それには私がイスラームの文字文化に造詣が深くないといけませんね。そうするとアーヤーンたちが持っている写本をきちんと位置づけることができるかも知りません。

それからもう１つは文化ですから、文字文化だけじゃなくて服飾文化とか、そういうこともいろいろ考えられますよね。あの人たちはやはりお金持ちですから、ものすごい立派な服飾、装飾品ですね。日本でいうような家具はありませんけれど、素晴らしいものを持っているんですね。そういう物、いわゆる民俗学、フォークロアの方ですね。あるいは美術史みたいなところから迫っていって、アーヤーンたちの服飾文化などに関する貢献ということが言えるかもしれませんね。それは女性じゃないとやはりなかなかね。ですから、スライヤー・ファローキー女史なんかが、そういうものが非常に良い資料になると、どこかで言ってます。実はアーヤーンを「名望家」と呼んでいいのかどうか迷いましてね。『前近代トルコの地方名士』の中では「比較ジェントリー論」にしたんです。名望家という自信がなくて。そうしたらすぐに16世紀のイギリス史をやっている明治の同僚から、「せっかく比較をやろうというからにはジェントリという言葉を使うのはやめた方が良い。ジェントリは難しい問題があるので」と言われました。岸本さんが「比較名望家論」というかたちで私の本を紹介をしてくれたんです。やはり名望家という言葉を使うとき、どこか文化人、教養人といったニュアンスが無いとちょっと気になりますね。しかし、文化的資料を使って何かできると思います。

ただ、そういうことを考える場合にもう一つ考えていいのは、基本的にはトルコは文字文化の国ではない。私はそう思っています。口頭によるコミュニケーションが発達している。まず本なんか

絶対に読みそうもない人でも、知識としていろんなことをものすごくよく知っているんですね。だからそういう一種の口承文化の国という気がしますね。

今、実は私はトルコのことわざを、ことわざの国際比較というプロジェクトでやっているんですけれど。文字文化の国のことわざは、特にヨーロッパや中国はかなり古典がことわざの起源になってます。トルコはあまりそういうことはない。やはり語りの文化ですよ。そういうことを含めて考えると、やはり遊牧民ですよね。そういう意味で既成の文化史の枠組みだけじゃなくて、いろんな角度から文化というものを考える余地が多いにあります。ありがとうございました。

**仁子：**あともう1点、すごく私が気になっているのは、家系の問題です。家系意識があまりないということは、多分名望家論などの比較をなされたときに、他のところではあるのに、なぜ無いのだというような話が出てきているかもしれないのですが、無いということは、今、永田先生がおっしゃった口承文化の問題なのか、それとももっと別の理由に起因するのか、このような点に関してご説明をお願いできれば。

**永田：**そうですね、それも非常に気になっているところでございまして。ひとつは、それは口承文化というよりは、やはり個人というものが基本の社会と言いますか、アラブなんかでもバヌー何とかと言いますよね。ですからアラブなんかで人名事典を作るとき大変でしょ？それはイスラームかも知れません。そこはもうちょっと勉強しないといけないんですけれど。でも、家系も無いとは言いきれないんです。ただ、日本だの中国だの韓国だのは家系の系譜がものすごいでしょ。ああいうのとは明らかに違いますね。

これは、非常に大きい問題ですね。ある意味じゃそれぞれの社会の根幹にかかわる問題ですよね。だから非常にいいご質問だし、私もいつも頭の中に入っています。ですから、カラオスマンオウル家の人たちがニューヨークで、フェースブックでおれの家系はどうのこうのと盛んに言っているのは、ひょっとしたら私の影響かも知れない。昔人類学者が飛行機から投げ捨てたコカコーラの瓶がアフリカの黒人の頭におっこちてきて、そこからその人の社会が変わったという話がありましたよね。人類学者は常にそれに気をつけると言いますよね。自分がフィールドに入っていくことによってフィールドを変えてしまう可能性というのは、人類学者の同僚からよく聞きましたけれども、もしかするとそういうことはあるかも知れないと。

**杉山：**京都大学ユーラシア文化研究センターに所属しております杉山と申します。
今日は面白いご発表いただきまして、どうもありがとうございました。先ほどの家系にかかわる質問になるのですが、基本的にワクフという活動をずっとしていたというようなのですが、例えばワクフをするときに自分の子孫をムタワッリーに指名して財産の分割というのを防ぐというのが一般的にあるかと思います。例えばひとつのワクフ対象物件に残されているワクフ文書を見ていけば、その家系というのを再現することというのはできないものなのでしょうか。

**永田：**はい、良いご質問ですね。私はワクフ文書をそういうふうにして使っています。ワクフ文書というのは非常に物件の所在場所を明確にしますから、誰それの息子の誰それがワクフしますよね？そうすると必ず親族たちの名前が出てきますから。カラオスマンオウル家の家系図ですね、あの家系は、昔ちっちゃな家系図を持っていたんですって。あるとき、女子大生が「卒論で使うから

貸して」と持っていって返ってこなくて、なくなっちゃったと言ってました。それからまた別なところで見せてもらった家系図は結構間違っているんですね。でも私はそういうとき、絶対間違っていると言いませんけれども。ですから誰の息子が誰という、家系図が書けます。なぜかと言うと、マニサのワクフ省がカラオスマンオウル家の家系のものすごい詳しいのを作ってくれたそうです。『前近代トルコの地方名士』の中にナーイル・カラオスマンオウルさんがその家系図を私に見せてくれて、私が一生懸命ノートに書いたんですね。それが間違っているかどうか点検してくれている写真があります。シリアでもいろんな偉そうな家を訪ねていって「ワクフ文書ない？」と見せてもらったけれど、ものすごく片々たるものしかないんですね。どうもワクフ文書の原本はあまり残ってないですね。国家がある段階でワクフを国家管理にしたときに把握します。私が使ったワクフ文書はアンカラの「ワクフ総局」（当時 Vakıflar Genel Müdürlüğü）で収集したものです。家系の中から出てきた資料じゃない。でも、そういう意味ではありますが、ワクフ文書と家系の問題というのは、非常に密接に結びつきます。

**福田：**京都大学・西南アジア史学研究室の福田と申します。本日はありがとうございました。文書館のことについて質問があります。わたしは文書館に行って研究をしたことがなく、先輩方の話を聞いて大変なんだなと聞いているだけなのですが、先ほど先生が言いかけられた、昔の文書館はいかに牧歌的だったかというような話がもしお聞きできるなら是非、聞かせていただきたいです。

**永田：**私が最初に文書館に行ったのは、ドクター論文を書くためでした。1967 年ぐらいからかな、文書館に行けるだけトルコ語ができるようになったのはですね。その頃は現在もある文書館の一室ですけれども、この部屋くらいのところに、この机を 2 つ合わせたぐらいの机が 5 つぐらいあるんですね。そこへ世界中の人が来るんですよ。そして文書館のベテランの人たちが教えてくれたりするんですよね。それで向こうの人たち、コーヒーとか紅茶をよく飲むでしょ。コーヒー係がいて、コーヒーはいちいちお金払わないで、チップみたいなものを渡します。コーヒー係は金を儲けたいからしょっちゅうお茶を飲まないかと持ってくるんですね。だからお茶を飲みながら 18 世紀の文書を見てて、一回だけ文書にコーヒーをこぼしたんです。それで、読めないと聞き合ったりなんかして。するとイナルジク先生もいるし、メフメト・ゲンチさんがいたりして、非常に和気あいあいと教わりながらやってました。そこにいると、みんな自分の文書を見てますから誰がどういう研究をしているかがすぐに分かるわけですよ。文書というのはかなり偉い先生でも私が読んでいる文書で、分からない、読めないところがありますよね。文書というのは書体もあるし、それから文脈もありますよね。だから文脈を無視して、「ほら、この単語どうやって読むの？」といきなり聞かれても読めないんですね。一人だけ 100％読んでくれた人がいました。これは文書館じゃないんですけれども。トプカプ宮殿の文書部にいたころのイスマイル・ハック・ウズンチャルシュル先生。トプカプ文書の整理をしていたんですね。私もトプカプ宮殿の資料を読みに行っていて、読めないと、あの先生は 100％読んでくれます。もう一人イブラヒムさんという人は私が聞いたので答えられるのは 70％。ウズンチャルシュル先生と知り合いになったので、私が日本に帰ってからある日年賀状が来たんですよ。ローマ字で。小学生みたいな字でした。そういう感じで万事和気あいあいにやってましたね、だけど許可が出るまでは大変ですよ。私はドクター論文のときは、もうほとんどトルコ人でしたから多分許可はもらったけど、大学がやってくれたのか、よく覚えていません。74 年に最初の学術調査で行ったときには本当にものすごく大変でした。いったん文書館に入ると、もう共同

体みたいなもんです。メフメト・ゲンチさんは、ヨーロッパの産業革命の影響がトルコの経済にどのように及んだのか。それが徴税請負制の前払い金の額にどう影響するかという研究を20年やったけれど失敗しました。でも、今彼はオスマン朝の経済史研究の第一人者ですね。そういう懐かしい人たちがいます。でもやはり外国人、特にアメリカ人は読めない。アメリカ人は読めなくても来るんですよ。なかにはカタログも読めない人がいる。アラビア文字で書いてありましたからね。「カタログも読めないのにどうして文書が読めるの？」みたいな、そういうのんびりしたところですね。

**江川：**今は日本からインターネットでカタログ見れるようになり、全く違うようにましたね。

**永田：**そうそうインターネットで。そうすると、アイテン・ハヌム（女史）が、さっと手伝ってくれますね。何をやっているんだか分からないうちに66冊の「資産台帳」がDVDに入ってしまった。66冊というと3万人分。3万人分の資産の記録があってそれを分析しました。DVDをもらったのは1日でしたけれど、家で全部読むのに1年かかりました。

**東長：**京都大学の東長です。私自身はもともとご存じのとおりアラブの研究からはじまっています。その頃から非常に素朴な疑問を持っているので尋ねさせて下さい。トルコ史の場合は、先生が開拓されました文書研究が主流になっていますよね。何か素人考えだと、まず刊本を使って研究して、もうちょっとすすんで写本をやって、かなりその先に文書があるみたいなイメージなんです。アラブ史もイラン史もそのような感じで研究が進展しているのに、なぜトルコ史だけこんなに、そこまで進んでいるんだろうと非常に不思議な感覚があったんですね。それは例えばそれが社会経済史が中心だから、そのように文書を使うということなのか、それともなにか他にトルコならではの特別な理由があるのか。そのことを昔から素朴に疑問に思っていまして、伺えたらというのが1点目です。それから2点目はきょうもお話を伺ってとてもビックリしたんですけれども、学際的な研究を1970年代ぐらいからずっとされていますよね。私自身は80年代が学生時代で、非常に講座縦割り的な、ディシプリンにがっちり絡め取られるような教育を受けてきて、自分たちが助手とかになった辺り、あるいは専任講師になってから、もっとインターディシプリンにやらなきゃと一生懸命ひとにも言ったし、自分たちもやってもきているつもりなんです。でも今日拝聴したお話では70年代も同じようなこともどんどんされているわけで、なぜ70年代ぐらいの早い段階で可能だったのかというのをさっきから考えているんです。1つはAA研の特殊な環境なのかなと思ったり、あるいはイスラーム研究の場合は結構古くからプロジェクトで学際というのはやってますよね、そういうことなのか、あるいはそれこそ私らは学園紛争の後の世代なのでそこら辺の、ある種あったバイタリティーというかエネルギーみたいなものがなくなって一時的に駄目になっていたのか。何か学際性みたいなものがどうしてあの頃にそんなに盛んだったのか。多分、他の学問の分野と比べても先駆的だと思うんですが、どうしてそういうのが可能だったのかというのを教えていただけないでしょうか。

**永田：**はい、なかなか難しい問題ですね。最初のご質問。やはり社会経済史が文書研究中心になりがちですけれども、例えば私のドクター論文、ムフスィンザーデ・メフメト・パシャですから、最初はやはり年代記からやりました。しかし、年代記で分かるのは官僚としてのポストのキャリアですよね。鈴木董さんなんかがやっている。年代記でそこを確かめておいて、もちろん写本も使って

ですね。歴史は一番最初にやるのは人物伝だと思うんですよね。そのときは私も年代記を読みました。そして写本も読みました。だけど私のようにカラオスマンオウル家の場合になると、そうはいきません。年代記というのはほとんどイスタンブルのことなんですよ。年代記といっても毎年の終わりに、官僚の誰それがどのポストに就いたみたいな話が多くて。それから誰が死んだとか、それに戦争でしょう。だから社会史的な資料はなかなか出てこないんですね。それからもう一つはアラブなんかの場合と比べると、やはりオスマン朝は写本を含めても、そういう年代記的なものはあまり豊富ではない。私はオスマン朝の刊行された主な年代記はほとんど持っています。それもちょっとした本棚に全部入っちゃいます。

じゃ文書はどうかと言うと、これはオスマン朝という大官僚国家の事務作業の廃棄物ですから。これが1930年代にハンガリーのラーヨシュ･フェケテなどの手によって整理されたのです。つまり、ヨーロッパの文書学の刺激を受けて。それから始まるんですよね。ですから、テーマによっては当然、最初はまず年代記で大きな枠を把握するという方法はやる必要があります。

それから2番目のご質問ですが、AA研もあまり学際的にやってなかったな、案外。私は言語学の人の発表には2、3回出てから二度と出ないことにしました。「チョムスキーの生成文法」ですから、ほとんど数学のようなものなんですよね。もう理論で動いているわけだから、トルコ語だろうがアラビア語だろうがかまわないんですよ。人類学の人とは酒を飲みながらもっぱらやりましたけど、学際的なというふうにあんまり意識していませんでした。ただ、酒飲んでいるとそうなるんですよね。それから、私なりに特殊なところがあります。私は勉強は嫌いでしたけれども、社会科の授業で中学のときに、近所の常盤台という駅に行って駅長さんにいろいろ話を聞いたり、そういうことが好きだったんですよね、そういうのがその後もずっと生きているんですね。そうそう、トルコで文書をいっぱい集めて日本に帰ってきて、74年以後の話ですが。これらの文書をどういうふうに処理しようかと考えていました。あの頃日本で、日本の農業の将来はどうあるべきかという議論がかなりあったんですよ。日本の農業というのは小さい土地に丹念に労働力を集中したり多様な作物を作る。それが自然の災害に対して非常に強い。だから、日本の農業は小農経営であるべきだという人と、やはりアメリカ・スタイルの、ブッシュ大統領というのはアメリカ随一の牧場主ですからね。ああいう大きな土地をブルドーザーで開墾する、そういうアメリカ型の大型経営がいいのだなど、かなり論争があったんですね。私は小農派だったんです。それで三木亘さん、家島彦一さんたちと宮本常一先生のお宅にお邪魔してお話を聞きました。あの方のいろんな生業の歴史についてのシリーズがありますよね。これを読むと、日本には農民だけじゃなくて、いろんな人がいますよね。いわゆる遊芸者とか、漁民とか、山地民とかですね。そういう人ならトルコで言えば牧畜民、遊牧民とかに相当するなと。わりとそういうことに興味があったんですね。だから歴史の文書を使うけれども、できるだけマニサ地方という、その現場の様子を観察しました。バスなんかに乗っても、いろいろ見てて、作物の種類なんかを隣のおじさんに聞いたりすることが好きだった。ですから、学際的とはまったく意識していませんし、今東長さんにいわれてビックリしたんですけれど、むしろそういう感じです、かなり個人的な問題です。『東洋学報』のトルコの農村に関する論文、採用されたから載っているんですけれど、「変な論文」と言われましたよ。中国史の論文から見るとまことに変なわけです。農村にこだわって。たとえば、シリアでも土地の面積を「ドヌム」と言うでしょう？あれは、トルコ語の「ドニュム」ですが、これは「ぐるぐる回る」という意味なんですけど、牛に引かせてぐるぐるぐるぐる回って耕す。ある意味では1日の労働量なんですね。そういうかたちだからなかなか面積単位にならないんですね。で、面積単位にしようと思って辞典を見ると

40 歩平方とあります。最初は自分の足で 40 歩ずつ歩いてみました。あとでわかったのですが、約 934 平方メートル（約 1 反）です。このような試みは歴史学の論文にあまりないんですね。しかし、われわれは、そこから始めなきゃいけませんから。「検地帳」を見たら農民の名前の後にアラビア文字の「ジーム」がくっついているんですね、それはチフトのチで、ジームじゃなくて、ペルシア語の「チ」なんですね。そこで私は「チ」記号の付されている農民を「チフト農民」と名前を付けたんです。これが日本史の徳川時代でいえば本百姓。自分のところの土地だけで生計が成り立つ。それから「ヌーン」が付せられてるのは「ニーム」、ペルシア語の半分という意味ですね。これは日本史で言えば水呑百姓。「ベンナク」は結婚したけど親の土地を耕している男子。もう一つ「ミュジェッレド」は独身の男子。女性は登場しないんです。そういうことは、最初は分からなかったですね。それを一生懸命考えて分かったんですけれど。そういうことを縷々と語った論文でしたので、「変な論文」。そういう意味じゃ人類学っぽいですよね。私はそういうのを学際的という意味じゃなくて、やはり知りたいことをつきつめていった結果です。そうすると例えばですね、「チフト農民」は当時の「法令集」（カーヌーン・ナーメ）によると、最も良い土地で 60 ドニュム持っているとありますから、計算すると 5 ヘクタール弱なんですよ。1 ヘクタールは日本の 1 町ですから、日本の江戸時代で 5 町も土地を持ってたら、堂々たる地主ですね。ただし、毎年その半分位しか耕さないみたいことを縷々と語っているもんですから、変な論文になったんだけれど。私は学際的という程の問題意識じゃないんですけどね。だから自分の考えている興味につられて何かやれば、あまり学際だなんだかんだ言わなくたって何にでもなるんじゃないですかね。「学際的に何かやろう」なんて言って成功したことはあんまりない。

**司会：**それでは議論が白熱いたしましたので、予定の時間を結構オーバーしましたけど、皆さん本当にお忙しいところありがとうございました。永田先生本当に貴重なお話ありがとうございました。

**永田：**こちらこそいろいろ重要な、良いご質問をいただきましてありがとうございました。